

「EUと加盟国シティズンシップ教育にみる『市民』像

—民主主義理論におけるシティズンシップ教育の意義—

埼玉大学 細井優子

政治理論の「市民」とその実態に開きが生じている。政治学者は「理性的で能動的な市民」を理論の前提としているが、そのような市民をどのように育成すべきかについては多くを語っていない。また、政治理論が目指す市民社会とは裏腹に、現代社会には反知性主義的空氣が漂っている。こうした事実を目を向けずに民主主義を論じることは、ポピュリズムなど民主主義の後退や劣化を導く危険性がある。

以上のような問題意識のもと、本報告では第一に、イギリスを中心にEU域内で実施されているシティズンシップ教育が目指す「市民」像を明らかにすること。第二に、それらが目指す「市民」像と政治・社会とのインプリケーションを検討することを目的とした。

第一の点については、C.ペイトマンをはじめ参加民主主義や熟議民主主義の諸理論が前提とする「理性的、知性的、包摂的、公共的、能動的」といった市民像とは全く異なる市民の実像が浮かび上がった。シティズンシップ教育への関心が高まっている背景を概観すると、そこから浮かび上がるのは、「政治的無関心、非道徳的、排他的、排外主義、反知性的」といった「市民」の実像であり、そうした状況では民主主義の病理であるポピュリズムを増幅する危険を指摘した。

そして第二の点については、ポピュリズム的言説が人々に支持されるメカニズムについて考察した。「現状読解が困難でどのような政策や政治が必要なのかわからない状況」では、ポピュリズム的言説が「真正な」ものとして受け入れられやすい。なぜなら自らの利害を擁護する自前の言説をもたない人々（「政治的リテラシー」をもたない人々）は、ポピュリズム勢力の扇情的な主張によって自らの利害についての認識と言説を与えられることがあるからだ。9.11後のイギリス社会は、まさにこうした状況によってUKIPやBNPなど排外主義的なポピュリズム政党が躍進していることを指摘した。

最後に民主主義の文脈におけるシティズンシップ教育の意義として、(1) B.クリックのいうところの「政治的リテラシー」をもった市民を育成することにより、「市民」の実像を参加民主主義や熟議民主主義理論が前提とする規範的市民像に近づける可能性をもつこと。

(2) シティズンシップ教育のみで民主主義的秩序の崩壊を防ぐのは不可能としても、問題解決への努力（民主主義）を放棄しない姿勢こそ評価すべきであること、を指摘して結論とした。

本報告に対しては6名の方々から示唆に富む貴重なご質問やご意見を賜ることができた。本報告により、民主主義という文脈においてシティズンシップ教育の効果というものを政治学的にどのように評価しうるかという問題が課題として明らかとなった。今後はこうした課題を中心に、引き続きこのテーマに取り組んでいきたい。